

深夜、窓ガラスをたたたく音で目が覚めた。

篤彦は葉子のための漢字メモを作りながら机の上で眠ってしまっていた。

半分開いている窓から首を出すと、和代の息を切らせた声が聞こえる。

「好恵さん、早う店に来て、夕希ちゃんが、えらいことになってるんや。ウチはす

ぐ医者よんで来るけに」好恵はそれだけ聞くと、篤彦に強い口調で「ついて来たら

いかんで！」と言い残り部屋を飛び出した。

篤彦は、気になって寝つけないまま外に出た。白い月はまだ中天にかかったとこ

ろだ。

夕希ちゃんがどうしたというんだらう。そう言えば、薬局の前で見かけたとき、

声をかけているのも気づかず、空ろな目をしていた。篤彦の足はいつの間にか、家

の横の路地からぎおんに向かっていた。どの家もしんと寝静まっている。表通りに

出ようとしたとき、自転車の明かりが二つ近づいてくるのを見て、角の防火用水の陰

に身をひそめた。人影が目の前を通り過ぎると、すぐ前でブレーキの音がした。医者

と和代だった。

ぎおんの勝手口が閉まっているので、お荒神の生け垣の方にまわった。庚申塔の

所まで来ると、しんとしたひろばにお堂の屋根とそれにかかる樹が重なって影を落

としている。それは巨大な怪獣の肩と頭のように見えた。いつかの夢の中で、お堂

の裏に姿を消した黒い獣の影が浮かんで篤彦は恐ろしくなった。

「早くぎおんに行かなくては」

篤彦は裸足になり生け垣の間から、薄い明かりのもれている庭に忍び込んだ。

軒先の風鈴の音にまじって医者の声が聞こえる。

「こりゃあ、やっぱり猫いらすやな。そうとう飲んどる。すぐに吐かさないかん。ぬるい塩水と真水を交代に飲ませるんや」

医者の落ち着いた声が聞こえ、寝巻き姿の夕希ちゃんが布団に寝かされたまま、慌ただしく縁側に運ばれてきた。顔は血の気がなく引きつり、口元に泡を吹いている。蛍狩りやダンスパーティーの夜の面影はない。

医師は注射器を取り出すと、袖から力なく出ている細い腕に、あらかじめ推察して用意してきた鎮静剤を二本打った。点滴液は、風鈴をぶら下げた軒先の釘に吊された。

医者が青白い頬を平手で打ち続けていると、低い呻き声とともに空ろに薄目を開けた。

「よっしゃ、これを飲んで吐くんや」

ウエツ、ウオツ、獣のように唸るたび、点滴液をむすんだ風鈴が、狂ったように調子はずれの大きな音をたてた。

庭先に色のついた胃液が散らばり、何とも言えない匂いがしてきて、篤彦はその場に吐きそうになるのを必死でこらえた。

夕希ちゃんの中の得体の知れない三足の虫が一度に暴れているのだ。白い喉から黒い塊が飛び出してきそうに思えて身体が強ばった。

好恵と和代が交互に、大きめの井に作った塩水とぬるま湯を次々に医師に差し出している。その傍らで、女将さんは蠟人形のような顔と、泡で汚れた口元を拭いている。

「薬が溶けてしまう前でよかったわい」

医者はそう言いながら、吐かせては飲ませ、飲ませては吐かせ、何十回となく同

じことをくり返した。

「これ、夕希ちゃん、夕希ちゃん、しっかりせんかな」好恵の言葉に合わせるように、篤彦も「死んだらいかん、死んだらいかん」と念じながら目を凝らしつづけた。

そのとき、篤彦は薄暗いぎおんの廊下の角から、縁側の光景をじっと見ている葉子の姿を発見した。寝巻き姿で突っ立ったまま動かない。葉子の胸の鼓動が聞こえるようで、すぐにそばに行きたかった。篤彦は自分の心臓も高鳴っていることに気がついた。

夕希の嘔吐は次第におさまった。

「先生、今晚のことは警察には言わんといて下さい。この子とはように話をしますけに」

女将さんが医者に頭をさげると、好恵と和代さんも頭を深く下げた。

「よっしゃ。まだ若いんじゃけに、ように話きいてやれや。二、三日、安静にさせたら体のほうは大丈夫じゃろ」

東の空の青みが薄らいできている。医師が帰り、和代と好恵が庭と廊下を掃除しはじめるのをみると、篤彦は急に睡魔に襲われた。

それから数日、葉子のことが気がかりなまま部屋に閉じこもりきりで過ごした。好恵に夜中にぎおんに行った理由を訊くと、「夕希ちゃんが急に具合悪うなって」とだけ答えた。

篤彦の心は痛んでいた。

「自分がいるのに、自分でそれをいなくさせようとする。自殺……、それは、一体、どういうことなのだろう？」

ぎおんの部屋からもれていた夕希ちゃんの泣き声が思いだされた。『金色夜叉』の映画の中でも、日本髪の若い女が池で入水自殺をしようとしていた。死の前にあったキューアイという不可解な言葉が、女の人への謎となって篤彦の心の底までしみこんだ。

「アツ、ぎおんの姉ちゃん、毒飲んだいうてほんまか？ もう店にはおれんようになる、ウチの家でそう話しよるのを聞いたが」

タケシの話しに、感情が尖った。あの夜中の騒ぎは、もうそんな噂になってきているのか。

「何も知らん！」嘘をつきながら、点滴液の下の夕希の生気のない顔と、獣のような呻き声を振り切ろうとした。

「ハイ、葉子ちゃんからの預かりもん！」

好恵から紙袋を渡されたのは、あのことがあった二日後だった。開けると、ひらがなで「じゅえきのおと」とだけ書かれた紙と棕の木の葉が入っていた。好恵がのぞき込むのを篤彦は手の平でかくした。

「葉子ちゃん、一昨日から熱出して寝てたんやて。けど、大分良うなってきたんで、和代さん、今朝、早うに大阪へ帰らしたそうや」

いきなり聞かされた事実には、篤彦は身体中の力が一度に抜けていくのを感じた。棕の葉を見ながら、葉子は昨日も熱のある体であるそこへ行ったのだと思うと切なくてたまらなかった。「また明日」の約束を守れなかった自分が情けなかった。

篤彦はその紙袋を持つと、棕の木の下に急いだ。ツクツクボウシが同じように鳴いている。

向かいあって幹を抱いた棕の根元に立つと、葉子が耳を当てていたあたりに自分

の顔を持っていった。

「葉子ちゃん、葉子ちゃん……」

呼びながら、篤彦は涙が止まらなかった。

野辺の送り

夏休みも、もう残り一週間になっていた。

その日、夜あけには間があったが、部屋は薄明るかった。月明かりに、叔父や叔母の顔がうかび、低く和した読経の声が流れている。篤彦は、静かで畏れのこもったその空気に押し包まれながら、祖父を見守っていた。

栄三郎の容態が急変したのは、盆すぎ、昼夜の温度差が大きくなりかけた頃にひいていた風邪がこじれて肺炎になった直後だった。「今夜が峠じやろのお」医者にそう告げられた日、叔父は妹弟たちを呼び寄せ「ワシの最期のときは、皆で般若心経を唱えてくれ」と、若い日に聞いていた栄三郎の遺言を伝えた。

般若心経は、篤彦も小さい頃から遍路の巡礼や御大師講で聞き慣れていたお経だったが、親の今わの際に、子どもたちが一丸となって唱える般若心経は初めてだった。途切れたり和したりしながら続いていた読経にまじって、母親に揺り起こされた幼い従兄弟の声がした。

「お爺ちゃん、なんで目開けへんの？ なんで」

口元をおさえた叔母は耳元で、「今、お爺ちゃん、仏様になったんで」と涙声でささやいた。「まんまいさん」というその丸みのある言葉は、緊張した重い夜気の

中で長閑すぎる響きをもっていたが、読経がおわると、それぞれが堪えていた悲しみは、すすり泣きとなって明け方の部屋に広がった。

(以上10月17日放送分)